

## 作家論

### ルイス・ブニユエル―破壊へのいざない

安井廣之　クリニック院長

スペイン内戦では死の危険にさらされながら共和国派として闘い、砲声と銃殺刑のはざままで常時拳銃を携行しながら生活していた。共和国政府からパリに派遣されてからは、ヨーロッパ各地で反フランコ作戦を展開し、時には密かに陸路ピレネーを越えて、反フランコの宣伝文書を母国に運んだ。一九四六年、メキシコに亡命。

こんな修羅場をくぐった映画監督が、他にいるだろうか。彼は三二本の映画を残したが、本稿では、そのうちの二作品を紹介し、私なりの思いを述べてみたい。

#### 『アンダルシアの犬』

眼球が切り裂かれ、ゼリーののような硝子体がどろりと流れ出す。手の平に開いた穴からはい出す蟻の群れ。道の真ん中で、切断された手首を杖でもてあそぶ陰気な若い娘。部屋の中で欲情して女を追いかけ回す男、そしてその死。

ロープで引きずられる二台のピアノと神父姿のサルバドル・ダリ。室内での二丁拳銃乱射と殺人。海辺の砂に下半身を埋められた男と女の死体。

『アンダルシアの犬』は、一九二八年にブニユエルが撮った処女作である。無声映画で、一貫したストーリーはない。にもかかわらず、最後まで息をつかせない。ブニユエルと彼の親しい友人ダリが、二人の見た夢を合わせて創った映画である。シナリオはスペインのダリの家で二人して書き、撮影はパリ郊外のビヤンクール撮影所でたった二週間で終えたという。俳優たちは自分が何をしているか皆自分からなかったとのことだ。それに、アンダルシアの風景も犬も出てこない。ブニユエルはこの映画を、殺人への呼びかけに他ならない、と言っている。

人々はこれをシュルレアリスムと呼んだ。しかも、傑作だと。この映画の解釈は観る人に委ねられている。だが、解釈なんてできるのだろうか。

#### ブニユエルとは？

映画を好きな人でも、ブニユエルを知らない人は多いだろう。

カトリーヌ・ドヌーヴが倒錯した性を演じた『昼顔』（一九六六年）の映画監督といえば、思い出す人もあろうが、これとて五〇年以上も前の作品である。それ以外に日本で比較的知られているのは、『ビリディアーナ』（一九六一年）、『皆殺しの天使』（一九六二年）、『小間使いの日記』（一九六四年）、『ブルジョワジーの秘かな愉しみ』（一九七二年）、『自由の幻想』（一九七四年）、『欲望のあいまいな対象』（一九七七年）などである。

ブニュエルは一九〇〇年にスペインで生まれ、主としてメキシコとフランスで仕事をし、一九八三年にメキシコで亡くなった。遺言により、葬儀はおこなわれず、墓も造られなかった。

写真で見るブニュエルの容貌には、ひと目見たら忘れられない凄みがある。医者としての私の印象では、バセドウ病すなわち甲状腺機能亢進症を疑わせる大きな眼が特徴的だが、いろいろ資料を渉猟しても、彼がこの疾患の治療を受けていたという記録はない。

彼に関しては、四方田犬彦氏が二〇一三年に「ルイス・ブニュエル」（作品社）を発表しており、おそらくはこれを超える質と量を持った論考は、今後出ないと思われる。この本を前にすると、私は畏敬の念を禁じえない。

ブニュエルに強い主張があることは、どれでもよいから彼の映画を一本観ればただちに分かる。ジョン・ヒューストンは、「ブニュエルの映画は、どんなジャンルのものでも、たちどころに彼の作品と分かるほど他と違っている」と言い、イングマール・ベルイマンは、「ブニュエルの創る映画は常にブニュエル映画だった」と述べている。

彼の映画は、どれをとっても、筋書きがあるのかないのかわかりにくく、人をたぶらかすような雰囲気濃厚に漂い、同じ俳優がどの作品にももつともらしい顔つきで繰り返し現れ、また、痛烈極まるカトリック批判、拍子抜けするような終わりかた、等の特徴がある。

彼は映画を通じて何を言いたかったのか。それはよほど目を凝らし頭を働かせながら観ないと見えてこない。いや、いくら目を凝らして観ても、世の実相を表象でしか捉えていない人には永遠に不可解だろう。ブニュエルは表象の根を掘り起こし、蒙昧な常識や信心を揶揄し叩き壊す。彼も彼の映画も一筋縄ではいかないのだ。

煙に巻かれた批評家の中には、ブニュエルを象徴主義者と捉え、映画に登場する何々は別の何々を意味するとし、映画から政治的な意味を汲みとろうとする人たちもいる。当のブニュエルは自作の説明を一切せず、「私には考えなん

てない。あるのは本能だけだ」と言い切っているのだが。

ブニユエルには、死の前年に出版した自伝「映画、わが自由の幻想」(一九八四年。矢島翠訳、早川書房。原題は「わが最後の吐息」)があり、これには、彼の映画表現の基礎をなす人となり、性格、環境等が活写されている。この自伝の執筆に力を貸した共同脚本作家のジャンクロード・カリエールは、この著作について、「あんなもの、法螺ばかりだよ」と言い放ったと伝えられるが、私には信じられない話だ。この自伝は誠実に書かれているし、文句なしに面白い。

### 中世を生きる

ブニユエルの生まれたアラゴン州カランガはスペイン北東部の田舎にあり、カトリックの伝統と封建時代の身分制度がそのまま続いているような村であった。彼が生まれて間もなく、一家は州都サラゴサに引っ越すが、幼年時代は毎年休みになるとカランガで過ごした。

イベリア半島はかつてローマ帝国の一部をなし、ヒスパニアと呼ばれていたが、四世紀のゲルマン民族大移動に伴い、西ゴート族が支配者となる。八世紀以降はアフリカから北上してきたイスラム勢力がサラゴサの北まで占領し、その支配が終わるのはようやく一五世紀になってからであ

る。ちなみに、キリスト教徒による半島の奪還がレコンキスタ(再征服)である。

ブニユエルは、カランガではあまたの侵略者があい次いだ結果もろもろの血が混じり合ったと述べているが、事実彼の顔もラテン系とは言いがたい。なお、一五世紀には、カランガにはキリスト教徒の家は一戸しかなく、他は皆アラブだったそうである。レコンキスタ後も、カランガでは時の動きが止まったまままで、第一次世界大戦(一九一四〜一八年)まで中世が延々と続いていたという。

サラゴサで彼は厳格なイエズス会の学校にはいり、カトリックの規律で躰けられるが、一五歳のときの飲酒がきっかけで非宗教的な国立高校に転校する。そこでの自由な雰囲気(の二年間にダーウインの「種の起源」を読み、目のくらむ驚きを体験する。それもそのはず、聖書によれば神は人間を含むこの世界を六日間で造ったことになっているが、ダーウインは進化という考えかたでこれを否定したのだ。これによってブニユエルは、内なる信仰の名残りは跡形もなく消え去った、と言っている。彼はこの時期に、サラゴサの小さな娼家で、童貞とも訣別した。

神による天地創造は我々日本人には荒唐無稽な話だが、現代に至っても、米国の熱烈なプロテスタント信者の中に

は、これを固く信じ、進化論を目のかたきに行っている人たちが大勢いる。これを見ても、スペインの土に染みこんだカトリック信仰が、土俗化して人々の深層心理に沈殿していることは想像にかたくない。

ブニユエルは幼少時イエズス会の学校にかよったと記したが、このカトリックの会派はイグナチウス・ロヨラらによつて一五三四年に創設され、その会員であるフランシスコ・ザビエル、ルイス・フロイス（「日本史」一五九四年）、アレッサンドロ・ヴァリニャーノ（「日本巡察記」一五八三年）らが一六世紀に来日してキリスト教の布教に努めたことはよく知られている。

### 『ビリディアーナ』

この映画はフランコ政権下のスペインで撮影された。メキシコに亡命していたブニユエルが、その才能と実績を買われ、母国に招かれての制作であった。

『ビリディアーナ』は緻密に考えられたストーリーに、聖書に出てくるエピソードをいたるところに織り込んだ作品である。そうは言っても、物語の展開に無理はなく、一貫性があるので、分かりやすいし、かつ面白い。また、男女の表情の微妙な変化やちよつとした眼の動きに性的な意

味を匂わせていて、ブニユエルが隠しても表に出てきてしまう男女の心の動きを熟知した監督であることを教えている。

ヘンドルのメサイアが流れ、「ハレルヤ、ハレルヤ」と穏やかに繰り返される中、古い修道院の映像とともに映画は始まる。ハレルヤとは、神を褒め称えよ、の意である。そして、シルヴィア・ピナルの演ずる美貌の修道女ビリディアーナが、これ以上は望めないほど清楚かつ無垢な姿で登場する。ブニユエルは、この美貌を徐々にゆがめ、最後には男を求める女の顔にしてしまう。

前半の相手役ドン・ハイメはフェルナンド・レイ。『汚れなき悪戯』（一九五五年）に、語りべの神父役で出ていたの思い出す。また彼は『フレンチコネクション』（一九七一年）および『フレンチコネクション2』（一九七五年）において、ジーン・ハックマン演ずるポパイの敵役でマルセイユの麻薬の元締めアラン・シャルニエを演じている。彼は本作以降のブニユエル作品に繰り返し出演する。後半の相手役で、ドン・ハイメの庶子ホルヘ役はフランシスコ・ラバル。『昼顔』ではギャングのイポリットを演じている。二人の存在感と男くさは相当なものだ。

静謐ともいえる雰囲気の前半がドン・ハイメの自殺で終

わると、後半の展開は凄まじい。

敬虔なカトリック教徒ビリディアーナは、街の乞食を集めて屋敷の敷地内に住ませ、ともに畑を耕して神の園を創ろうとする。しかしその作業は、新しい考えを持ったホルへの電気を導入し屋敷を作り変えようとする工事に圧倒される。

たまたまあるじたち全員が留守の間に、乞食たちが好奇心から屋敷に闖入し、豪華な備品を使って夕食を始める。彼らは酔うにつれて羽目を外し、座は乱れていく。ダ・ヴィンチの最後の晚餐をパロディー化した構図で乞食たちが席につき、記念写真を撮る真似までするが、そのカメラは女乞食の露出された性器である(画面にはあらわれない)。蓄音機から流れる大音響のハレルヤに合わせて乞食たちが乱舞する。彼らは泥酔して感情を激発させ、破壊行動に及ぶ。そのとき外から戻ったビリディアーナは乞食の一人に強姦されかかるが、男がホルへにそそのかされた別の乞食に殴り殺されることで難を逃れる。酔った乞食たちの乱行は、宗教的道德の後ろに潜む人間の本性の暴露に他ならない。

乞食たちのいなくなった屋敷で、ある夜、ビリディアーナがホルへの住まいを訪れ、彼の隣の席につくところで映

画は終わる。

ブニユエルは入念に仕掛けを施してカトリシズムを揶揄し、愚弄し、ついにはその価値を否定する。仕掛けは複雑だが、有機的につながっていて、次々と連鎖反応を起こし、最後には全部倒れる。あたかも極めてうまくできた推理小説のように、精妙な作りである。

この作品は、ただちにスペインとイタリアで上映禁止となり、ブニユエルはイタリアへの入国を一時禁止される。この経緯を見ても、ラテン系の国々においてカトリックがどれほど大きな勢力を持ち、国家権力と結びついていたかが分かるであろう。両者は利害が一致していたのである。

一方、そんなことにはお構いなく、『ビリディアーナ』は一九六一年のカンヌ映画祭でパルムドールを獲得する。

カンヌはフランスにあり、フランスは同じくカトリック国でありながら、スペインよりもはるかに開放的である。ブニユエルは自伝の中で、「一九二五年にはじめてフランスに出て来た時、男女が街なかで接吻しているのを見て、世の中にこんなことがあっていいものか、実に言語道断な振舞いだ、という気がした。同様に、若い男と娘が正式な結婚もせずに同棲していることもあるので、仰天した」と述べている。

私はフランス留学最後の年である一九七三年の夏にスペインを車で旅行したが、当時はまだフランコ將軍の軍事独裁政権下にあつて警察国家の雰囲気があり、地味で敬虔な人々のただずまいと相まって、治安は極めてよいという印象を受けた。同將軍が七五年に死去すると、スペインは立憲君主制に移行し、治安は悪化する。八四年に同国を旅行した際、妻は、子供の世話をしているちよつとした隙に、ジプシーと思われる女にハンドバッグからパスポートとトラベラーズチェックを盗まれた。昨今はスペインに限らずフランスでもスリが多く、しかも組織化されたプロの集団が活動しているので、街なかを歩くとき、公共の交通機関を利用するときにはよほどの注意が必要である。

### 坂口安吾「墮落論」

戦前、日本において中世のカトリックとほぼ同様の役割を果たしていた宗教は神道である。一九四五(昭和二〇)年八月、日本は戦争に敗れ、GHQは国家神道を禁止した。

その翌年四月に、坂口安吾は「墮落論」を発表する。

「しこのみたてといでたつわれは」(いやしくも天皇陛下の御楯となつて出かけます私めは)。

「おおきみのへにこそしなめかへりみはせじ」(天皇陛下

下のおそばにて死にましよう、後悔はしません)。

「ももとせの命ねがわじ いつの日か 御楯とゆかんきみとちぎりて」(百年の命は願いません、いつの日か天皇陛下の御楯になつて出征するあなたと結婚したのですから)。

安吾が自著の冒頭に引用した歌である。こんなきれいごとの歌に送られて、多くの若い兵士たちが死んでいったのだが、敗戦により、生き残った若者たちが同じ運命を強制されることはなくなった。

実際、戦前・戦中においては、大君(おおきみ、天皇陛下)に命を捧げることは国民の義務であつた。天皇のため国のために死んでこい、と言われて断ることができない状況は、現代の日本においては想像しがたい。しかし、それは一九四五年までは日常だつた。従わなければ、罰として強制的に最前線に送られたのだ。

鹿児島県の知覧町にある特攻平和館に行くと、若い飛行兵たちの書き残した遺言を読むことができる。まだ二十歳にもならない兵士の書くことといつたら、「お母さん、ありがとうございました」「天皇陛下萬歳」くらいしかないではないか。私はこれらを読んで、涙せずにはいられなかつた。彼らは爆弾をかかえた飛行機で六五〇キロ離れた沖

緋戦線に飛び、「国のために死ぬ」という大義を信じて、米国の戦艦に突っ込んで行ったのだ。無駄死にだとは露ほども思わなかったろう。

死んだ兵士たちは何も語らないが、死なずにすんだ特攻隊員は戦後を生きのびる。

安吾は言う。特攻隊の勇士が闇屋となり、戦争未亡人が新たな男を見つけるのは時間の問題だ。戦後の半年のうちに世相は変わったが、人間が変わったのではない。人間は元来そういうものであり、変わったのは世相の上皮だけのことだ、と。

安吾は天皇制についても述べている。日本の政治家たちは自己の永遠の隆盛を約束する手段として絶対君主の必要性を嗅ぎつけていた。天皇制はきわめて日本的な政治的作品だ。天皇は歴史上大したことをしていないが、結局つねに政治的理由によってその存立を認められてきた、と。

彼はさらに言う。「六十七十の將軍たちが切腹もせず轡を並べて法廷にひかれるなどということは終戦によって発見された壯観な人間凶であり、日本は負け、そして武士道は滅びたが、墮落という真実の母胎によってはじめて人間が誕生したのだ」。そして、彼は断じる。「人間は変わりはない。ただ人間へもどってきたのだ。人間は墮落する。

義士も聖女も墮落する。それを防ぐことはできないし、防ぐことによって人を救うことはできない。人間は生き、人間は墮ちる。そのこと以外の中に人間を救う便利な近道はない」。

天皇のため国のために命を捨てることを余儀なくされてきた日本人だが、戦後ひとたびそのくびきが解かれると、戦争を支えてきた秩序と道德の体系は崩壊する。闇市が立ち、泥棒が跋扈した。

私の幼年時代は、終戦直後の混乱期と重なる。衣食は足りず、礼節は回復途上にあつた。道德の衣は薄く、むき出しの自我がぶつかり合い、のし歩いていた。暴力をもってもめごとを解決する風潮が半ば認められていた。

安吾のいう墮落した人間はありのままの人間であり、ブニュエルによってカトリシズムを引きはがされた乞食たちもまたありのままの人間であつた。

### 一人ぼっちの闘いを

ブニュエルはカトリックの衣をはぎ取り、隠れている人間の本性を暴き出した。あまりに本当のことを言ってしまったために、彼の作品は上映を禁止され、彼の入国を拒否する国まで現れた。

統治の道具として宗教を利用している国は多い。スペインやイタリアがそうであったし、米国では大統領が就任式に際し、聖書に右手を置いて全能の神に宣誓する。また議会や裁判での宣誓にも聖書に手を置くことが求められる。イギリス国王の戴冠や王族の結婚式も聖堂でおこなわれる。キリスト教、イスラム教を問わず、憲法で神の存在に言及している国はいくつもある。

ブニユエルは『ビリディアーナ』において、古い世界の崩壊とカトリシズムの陳腐さを描いた。あれから六〇年。スペインもイタリアも大きく変わった。だが、カトリックは衰えることなく続いている。ローマ法王が訪れる国々での信者の歓迎ぶりがそれを物語る。なお付言すると、現法王フランシスコはブニユエルが初等教育を受けたイエズス会の人である。

かつて大日本帝国憲法第三条には、「天皇ハ神聖ニシテ侵スベカラズ」と明記されていた。天皇は絶対であったのだ。国家神道は統治の道具として機能し、天皇はその頂点に立っていた。政治家にとって、こんな便利なシステムはない。全ては天皇陛下のため、と言えば逆らうことも抗議することもできないからだ。統制は日常生活にまで及び、「靖国神社の下を電車が曲がるたびに頭を下げさせられるばかりし

さには閉口した」と坂口安吾は書いている。いま、我々はほぼそんな状態からは解放されている。「ほぼ」と書いたのは、またしても統制の雰囲気は漂い始めているからである。安吾は「墮落論」の最後に、「人間は結局天皇を担ぎださずにはいられなくなるだろう」と予言している。

我々日本人はあの「日本人とユダヤ人」を著わしたイザヤ・ベンダサン（＝山本七平）の言うように日本教の信者であり、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教と連なる砂漠に生まれた一神教の思想には生理的になじめない性向を持っている。我々は日の出を拝み、油揚げをくわえた狐を拝み、折れた針をも拝む。拝まなくてもよいものまで拝む。あらゆる物や所に神を見いだすアニミズム的発想が性に合っているといえよう。だから、人間である天皇を神として拝んだのだ。

人は誰しもよりどころのある方が心休まる。それはカトリックも仏教徒も日本人も同じだろう。だからといって、聖書に神が存在すると書いてあるから、祈るのか？ 木や金属でできた仏像は人が作ったものなのに、拝むのか？

「南無阿弥陀仏と唱えれば救われる」と説教をする浄土真宗の坊さんに尋ねたことがある。「もし阿弥陀仏がいなかったらどうするんですか？」と。坊さんは「えっ」と言っ



たきりしばらく沈黙し、「そんなことは考えたことがありません」と小声で言った。私は坊さんに、阿弥陀仏がいるのかいないのかを是非とも考えてもらいたいのだ。

ブニユエルも安吾も自分と世界を深く見つめ考えた。二人に共通しているのは、本質を暴いたということだろう。それには巨大な勇気が要ったはずだ。そして、彼らは自分でこうだと思ふものを残して去った。残したのは、身に危険を及ぼすようなものであったが、それでも彼らは残した。人は孤独である。だから、何かに頼りたくなる。だが、ありもしないものに頼って何になろう。我々は一人ぼっちの闘いを死ぬまで続けなければならないのだ。我神仏に頼らず、の気概を持って。

改めて思う、ブニユエルは強い人であった、と。

## 黒木和雄私論(下)

林久登 スタッフ

### 黒木にとってのトラウマ戦争&核

#### 『原子力戦争』(1978年)の失敗

『祭りの準備』で評価を不動のものとした黒木は、1978年に福島第一原発をモデルにした『原子力戦争』という映画を撮る。日本の劇映画ではじめて原発の事故隠しを描いたものである。

彼は以前(59年)、岩波時代の駆け出しの頃、東京電力からのオフアアを受けて火力発電所のPR映画(『海壁』、『ルポルタージュ・炎』)を撮っている。これは建設記録で、埋立工事から始まってボイラーに点火するまでの数年にわたる大がかりな仕事であった。記録作品ではあるが、そこに黒木色を出そうと目論んだが、自分の意図したような作品が出来ず、結果として建設礼賛になってしまったことから、もやもやした気持ちを抱えていた。

それから20年。「福島原発の無事故は事故を起こさないということではなく、事故を外部に漏らさず、もみ消すことである」という田原総一朗の告発本「原子力戦争」(76年筑波書房)に出会う。そしてそれが、東京電力であることを知って映画化を決意する。当時、この福島原発は時々放

射能漏れを指摘されていたが、地元メディアの追及もなく、真相は闇に包まれていた。

しかし、脚本家との齟齬で黒木の狙った娯楽性の中に社会性を入れようとしたストーリーは思うように仕上がらなかった。そこでいつもの悪い癖が出て、クランクインしながらイメージに合った台本に作り上げようとした。だが、しばしば行きづまり逡巡した。この作品はオールロケでスタッフ、キャスト全員が寝食を共にしていた。原発担当記者役の佐藤慶は、そんな黒木の煮え切らない態度をいち早く察知し、毎晩黒木の部屋の前に立ち全員に聞こえるような大声で「黒木のバカヤロウ、お前はダメだ、低能だ」と罵ったという。(映画作家「黒木和雄の全貌」フィルムアート社)

更に、予想はしていたものの、撮影に入ると東京電力のガードは固く、ロケ隊のエリア内への立ち入りを一切禁止した。それは企業の自衛策として当然だろう。映画ではこの原発内で起きた事故をもみ消そうとする上層部に対し、内部告発しようとした技師が殺される設定になっているのだから：・穏やかでない。結局、第一第二原発周辺を思うよう撮れず、黒木のねらったドキュメンタリー色を入れようとした試みは、またしても失敗に終わった。

それから33年が経ち、2011年3月11日福島県沖に発生した大津波で、何と同原発は、世界でも類を見ない原子炉のメルトダウンという大事故を起こす。未曾有のカタストロフィ事故を経験してみると、ハインリヒの法則(大事故の背景には、必ず数多くの小さい事故が起きている)ではないが、東京電力が当時の小さなトラブルを隠さず、事故対策に取り組んでおれば、ここまでの壊滅的な事故には至らなかったかもしれない。現にその大事故の3年前に政府の諮問機関が出した大津波15.7メートルの襲来予想も東京電力は無視している。当時の田原や黒木の警鐘は当たった。この事故は東京電力にとどまらず、多くの人々の生活の場を奪い未来を変えた。余りにも大きな代償であった。

### ゆるぎなき非戦主義者

#### 『TOMORROW/明日』(1988年)への挑戦

『原子力戦争』の失敗にもかかわらず、1988年になると黒木は長崎に投下された原爆映画をテーマにした作品『TOMORROW/明日』に挑戦する。1945年の夏、黒木少年は同じ九州の霧島の祖父の家で、何をすることもなくブラブラしていた。父母は満州にいたが、黒木少年は学校の成績が振るわず、落第して満州での進学をあきらめ、元

軍人の祖父の家に預けられていたのだ。

そして、その夏の8月9日11時02分長崎の上空に原爆の閃光が走り、一瞬にして7万人の長崎市民が姿を消した。同じ時刻に無為に過ごしていた自分が生き延び、何の罪もない人々が大量殺戮に合ったわけだ。その理不尽な戦争というものを映像に残せないか、黒木はずっと考えていた。

彼は、その手法として井上光晴の「明日」(1982年)に書かれたビフォア(原爆投下前)を取り入れた。今までの映画で、ザ・デイ・アフター(投下後)はあったが、ビフォアはなかった。ビフォアの方がよりインパクトがあると読んだのだ。こういうひらめきは黒木ならではの、人のやらないことに挑戦する天才的なセンスを持っている。

映画は、その8月8日の朝から24時間後の悲劇の時間まで、死を運命づけられながらも、そんなことは露とも知らない市井の人々の悲喜こもごもの日常生活が描かれている。戦時下のささやかな結婚式から始まるこの映画は、式に出席した親族のそれぞれの出来事を、翌日の朝まで平行して描いている。新婚初夜の2人、恋人との別れ、新しい

生命の誕生、娼婦と過ごす若い兵士……観る側は、その平穩な日常生活が崩壊することを知っているから、彼らの喜怒哀楽がいつも以上に増幅されて見える。そのドキドキ感が悲劇を際立たせる。黒木の演出力はさすがで、どこにでもある家族の風景を描きながらも、起伏を持たせ退屈させない。いつもの黒木と違って、出てくる面々が皆善人ばかりなのが、ちょっと気になるが……

最期、運命の8月9日、よく晴れいつもと変わらない朝、B29が頭上に現れ突然閃光が走る……で暗転。まるで、現代音楽のラストのような感じで、今までの映画で観たことのないシニールなエンドロールだ。

主役らしい主役のいない、いわば親族たちの群像劇。そんな中で、やはり女性の存在がひとときわ目につく。まず、馬淵晴子だ。『祭りの準備』に続く母親役。黒木が気に入っている女優だけに絶妙の母性的雰囲気を発揮する。それに彼女の娘で妊婦役の桃井かおりが素晴らしい。

実は黒木は80年に『夕暮まで』という吉行淳之介原作の女性向け映画を撮っている。当時「夕暮れ族」という流行語が生まれるほど騒がれた本で、東宝は権利を得ると映画化を急いだ。例によって、まだ黒木自身演出プランが固ま

っていないのに、周りにお膳立てされるままに封切り日が決まり撮影を開始する。しかし、彼の悪い癖で、走りながら考えているうちに迷いが出てくる。この映画の主役は桃井かおりだった。結婚まで処女でいたいと言い、セックスを伴わない相手とベッドを共にするという物語で、オジサンの黒木にはちよつと手に負えなかつたのではないか。

元々映画作りは、役者も意見を述べる共同作業と考えている実年齢に近い、かおりが黙っているわけがない。煮え切らない黒木の態度にトラブルが絶えなかつたという。当時の週刊誌などは、撮影現場で揉めてモノが乱れ飛んだという話まで、面白おかしく書きたてられた。

それから8年が経つ。黒木は度量が大きい、彼女に再度声をかける。それだけ女優桃井を買っていたのだろう。彼女はそんな黒木の期待に応え、出産シーンは誰にも真似のできない迫真の演技を見せている。

### 『父と暮せば』(2004年)の黒木の決意

黒木は日頃から井上ひさしの舞台に興味を持ち、彼の卓越した発想の芝居に映画化への食指が働いていた。そして

1994年紀伊国屋での梅沢昌代とすまけいの二人芝居『父と暮せば』を見て、映画化を決意する。

目の前で建物の下敷きになった父を見捨てて逃げ、1人だけ生き延びた劇中の娘の姿は、45年夏、鹿児島で軍需工場に動員されていた中学生の時、隣にいた同級生が脳天を真つ二つ割られる直撃弾を受け、恐怖の為逃げた自分の体験と重なる。つまり彼女は、まさに黒木自身だったのだ。

黒木は生き残った一人として、また映画人のはしくれとして、犠牲になった当時の同級生11人の亡霊に対し、この舞台劇を映画化する決意をする。井上ひさしの戯曲を黒木がそっくりそのまま映画化するという大胆な試みだ。映画はほとんどは限られた室内で、登場人物も父と娘それに青年の3人だけ、元々舞台劇だから当然台詞が主。その言葉によつてドラマが作られていくので、映像で見せる映画とは違う。そんな困難を承知の上でやろうとするのだから黒木の並々ならぬ執念がうかがえる。

映画は23歳の美津江が、原爆で父を亡くし、一人で生活をしている。その娘を心配して死んだ父の亡霊が現れる、という幻想の世界だ。父は娘に気持ちを寄せる木村(浅野忠信)との恋の応援団として頑なな、娘の気持ちを徐々にほぐしていく。彼女は何かあると、「生きているのが申しわけな

い」と言つて、自分の殻に閉じこもる。それは、原爆投下時、奇跡的に彼女は助かり、目の前にいた父を見殺しにした負い目と、自分を偶然原爆から守ってくれた親友が犠牲になつていたからだ。

狭い限られた空間で宮沢りえの家事のふるまいは自然体で、小津の室内風景を連想させる。合い間に発せられるセリフは明瞭で品がある。彼女は23歳の未婚の女性役、当時実年齢は31歳、なのに全然違和感はない。役者に年齢は関係ないのだ。一方父親役の原田芳雄、黒木作品ではアーキーな無頼の役が多かったが、一転して娘を想う父親役。いぶし銀のような演技を見せてくれる。2人の広島弁の朴訥としたセリフ回しが素晴らしい。暗い重いテーマを吹き飛ばしてくれる。

ほぼ、井上の戯曲通りだが、一箇所だけ変更したという。それは父が娘に向つて「お前は人が振り向くような美人じゃない。その半分はワシの責任じゃ」というセリフだ。思わず振り返ってみたくなるような美人の、りえちゃんに失礼ではないかというので、映画では「確かにお前は、人がたまげてのけぞるような色気はない。でも、よう見たら、愛嬌のあるいい顔をしとる。それはワシの手柄じゃ」となっている。粋な計らいだ。

幽霊となって出てくる父と生きている娘との対話、現実には考えられない場面だが、ドラマの中にいつの間にか引きずり込まれていく。井上マジックのなせる業か。宮沢と原田という旬な女優と脂が乗っている老練男優という絶妙の組合せがあつて、はじめて成功した映画といえる。

## 結実したトラウマの映画化

### 『美しい夏キリシマ』（2002年）

黒木は井上ひさしの舞台劇『父と暮せば』を見て、映画化を決意したことはすでに述べたが、同時に、この映画の女主人公美津江を黒木の少年時代に置き換えた自伝的作品、『美しい夏キリシマ』の構想も練っていた。

2002年、結果的には『父と暮せば』に先行して黒木の集大成ともいえる作品『美しい夏キリシマ』に取り掛かる。

前作でもそうだが、黒木はここでも自分流の戦争映画をつくろうと考えた。『プラトーン』や『地獄の黙示録』のように、赤裸々な非日常の戦闘シーンを描くのではなく、無名の市井の、それも戦場ではなく銃後にいた人たちを撮りたいと考えた。そこにはまさしく少年時代の黒木自身の姿

があつた。つまり私たちが今生活をしているのと同じような日常的な営みが戦争によっていかに異常なものになっていくのか、ということを描きたかつたのだ。

映画は目の前で、親友が爆死するという地獄絵を見た少年康夫(柄本祐)が、今というPTSDになり、治療の名目から鹿兒島県霧島の祖父の日高家に預けられているところから始まる。康夫は、軍人出の厳しい祖父日高重徳(原田芳雄)の下、やさしいお手伝いのなつ(小田エリカ)や、はる(中島ひろ子)に囲まれながら、戦時下、何をすることもなく過ごしている。彼は日頃、死んだ友人に対し、「生きているのが申し訳ない」と思いながら無気力で、惰性で生きている。少女たちにわけも分からぬまま平手打ちを喰ったり(微妙な異性感情がからみコミカルなショットになっている)祖父や憲兵にも蹴られたり殴られたりする。痛めつけられることで、亡くなった友に許しを乞うているようにも見える。

そんな少年を映画初出演の柄本祐がひょうひょうと演じている。さすが柄本明の長男、気づいたらすっかり役者をしている。黒木はオーデイションで数多くの少年と会い、最後は柄本祐を主役の康夫に決めた。一見何を考えているかわからない風貌が、当時の彼自身を感じるところがあつ

たからという。ただ、主人公の康夫の描き方には氣を使つた。卑怯で臆病であつた自分を弁解する映画には絶対したくないと考えた。

少年康夫の迷いながら生きる様は哀しさと滑稽さが入り混じり、琴線に触れる。敗戦が決まり米兵が進駐して来る行列に、康夫は一人竹やりを持って向かつて行き、親友を失つた怨念をぶつけていく。誰が見ても勝てつこないとわかる行列に一人向かつて行く姿は、一途さと同時に滑稽感も漂う。

黒木はあるところでこう言っている。「11人の死んだ学友たちが『父と暮せば』の父親のように、私の前に現れて応援してくれていたら、自分はどれほど救われていただろうか」と、つまり、想像以上に黒木には、この少年時代のトラウマ(卑怯で臆病)が重くのしかかつていたことになる。また印象に残つたのは、康夫と、なつの弟稔が追っかかり、追っかけられたりする一見意味のないように見えるショットだ。まるで霧島の大自然の懐でチャンバラごっこをしているように映る。親たちの身分差に対する稔の僻みもあろうが、戦時下のどうしようもない少年の鬱屈した心情を黒木流に表現している。可笑しいのはもちろんだが、同時に何か哀しくて熱くなつた。

祖父役の原田は素晴らしい。戦前の絵に描いたような頑固親父役を見事に演じているかと思えば、裏では抜け目なくお手伝いのはるに手を付けている。そのはるは、うらみつらみを言うわけでもなく、重徳の進める負傷兵で不能となつて帰つてきた男秀行(寺島進)へ嫁いでいく。

ちよつと太目になつたが、石田えり(イネ)が出ている。相変わらず存在感がある。夫の出兵中に駐留兵(香川照之)と不倫をしている。しかし、戦死したと思つていた夫が、生きて帰つてくるのがわかり煩悶の末、入水自殺を図る。

バツクに流れる五島の子守唄だろうか、朗々と山村に染み渡る。哀しくて神々しい。溺れ沈んでいくイネを、くだんの兵隊は何もせず彼女を見捨てる。追つてきた息子の稔は水没した母を飛び込んで救い出す。溺れて沈んだのだから、大量の水を飲んでる筈だが映像では息子の膝にぐつたり横たわり息を吹き返すイネを写している。水を吐くようなショットはない。黒木にしてはリアリティに欠ける。

これを見て、私は小学生の頃、住んでいたD村でも入水事件があつたことを想い出した。学校から帰つて友達と遊んでいると、近所に住む馬喰の人が引き連れていた牛を放つておいたまま、「池に人が飛び込んだ」と駆けつけて来たの

だ。友だちの父と隣の海軍出身のオジサンたちが物干し竿を持って走って行ったので、子供の私たちもついていった。と、池の真ん中にポツカリと髪の毛が浮いて見える。海軍出身のオジサンが飛び込み堤にいた人が持っていた竿を渡して、オジサンはそれに捕まって女を引き上げた。そして、リヤカーで顔見知りの女の自宅(私の姉と同級生の母だった)まで運んでいった。びしょ濡れの服がめくりあがって下半身が露わになり、生々しかったことを記憶している。しかし、その母親はしばらくして自死してしまった。そこまですべて彼女を追い込んだ理由は何だったんだろう。所詮大人の世界の話、ガキの私には分かるわけがなく、当時の景色だけを鮮明に覚えている。

横道にそれだが、この作品は、哀しみも、苦しみも、罪も、どこからともなく流れてくる子守唄が、すべて包み込んでくれる黒木の宇宙空間が存在するような気がする。そんな中で愚かな戦争の為に、銃後の美しい霧島に住む一族が味わう日常の悲喜劇が見事に浮かび上がってくる。戦闘シーンは出てこないが、迫り来る敵軍の上陸を控えて、身構える霧島の村人のザワザワした日常生活を描くことで、戦争というものの不気味さ、恐ろしさが伝わって来る。黒木はこの映画を撮り終えて「この作品は一種のレクイエム

(鎮魂歌)だ。映画の仕事をしている人間のはしくれとして、映画を通して亡くなった人たちに、この映画を捧げたい」と、言っている。反戦映画(黒木は非戦と呼ぶ)としても素晴らしい。黒木の集大成になる作品と見た。

### 『紙屋悦子の青春』(2006年)における諦念

黒木の遺作となった作品。彼はこの作品を仕上げ、4月初旬の試写会に立ち会った後、8月の全国公開を待たず4月12日脳梗塞で急死した。(享年76歳)黒木ファンにとっては、まさに驚天動地の出来事だった。何故、そんなに生き急いだのだろうか。

彼の前期の作品は猥雑でアナーキーな映画が多かったが、潜在的に戦争体験から来るトラウマを抱えていた。それが、いわゆる後期の戦争ものとして結実する。前期の猛々しい無頼の世界を描いた作品を動とすれば、後期の戦争ものは、人と人の殺戮の世界でありながら、静の世界だ。声高に反戦を叫ぶでもなし、派手な戦闘場面が出てくるわけでもないが、銃後の庶民の生活を通して、戦争というものの酷さが、画面からジワジワと伝わって来る。

『紙屋悦子の青春』はまさにそんな彼のフィナーレを飾るにふさわしい静謐な映画だ。原作は劇作家松田正隆の戯



曲。後で分かったということだが、松田は黒木作品『TOMORROW/明日』を見て劇作家を目指したのだという。同じ志をもつ作家同士は引きあうようだ。そんなことは露知らず黒木は松田の舞台を観て、共感するところがありオフアーする。

東京大空襲で両親を亡くした悦子(原田知世)は、兄夫婦(小林薫、本上まなみ)と暮らしている。戦争はますます激しくなり、悦子の想いを寄せる明石(松岡俊介)も、特攻隊として出撃することになる。彼は悦子に片想いをしている友人の長与(永瀬正敏)に彼女を託し戦場に散っていく……長与は整備士官で本土に残る筈、友人に愛する悦子を譲ることで、心置きなく死ぬることだ。

それから50〜60年が経つ、映画は冒頭の回想シーンから始まる。とある病院の屋上のベンチで2人の老夫婦が座っている。それは悦子と永与だ。彼女の人生って何だったんだろう。戦争がなければおそらく別の人生があったはずだ。明石という友人のかけがえない命と引き換えに一緒になった2人はどんな戦後を送って来たのだろうか。その説明は映画の中ではない。そこには自分の人生を自由に選べなかった初老の悦子の諦念が見られる。

それは何も彼女だけに限らない。当時、多くの日本人が

戦争という理不尽な行為により不本意な生き方を選択させられたのだ。人間は本来もつと自由であるべきだ。自分の進む道は誰の邪魔もされず自分で決められる世の中でなければならぬ。黒木のそんな積年の想いが静かに伝わって来る作品だ。

兄夫婦が素晴らしい。とりわけ嫂になる本上まなみが秀逸。出撃前夜、最後のあいさつに訪れた明石が立ち去る時、兄嫁の本上が「悦ちゃん、行ってこんね！早う……明石さん、行ってしまいなさつがね！」と、義妹に掛ける言葉は琴線に触れる。

### さらば名匠黒木監督！

黒木は学生運動とゼミを通して自由という概念を学習し、温厚な風貌からは想像できない反骨精神の持ち主となった。そして少年期の体験から心から戦争というものを憎んだ。その考えは、彼のすべての作品に通底している。

彼は撮影所出身ではない。PR映画の世界から映画界に飛び込んできた異端の監督だ。だから当時のプログラムピクチャーの世界で撮っている秀才肌のメジャーの監督とは違って、何ものにも縛られない自由な発想を持っていた。

黒木は「人間が持っている暗い部分、負の部分、格好悪いところを見つめることで普遍的な人間の姿が見えてくる。そんな人たちを描きたい」と言っている。

そして、その皮切りが名作『竜馬暗殺』だった。私たちが生きていく世界には、光の当たっているところもあれば陰の部分もある。その陰の部分には他人に口外したくない、知られたくない世界がある。しかし黒木は違う。個人的な生い立ちの陰の部分や、自身の弱い部分を日頃から躊躇なく曝け出している。そしてある意味それを逆手に取り、彼自身の内面を丸ごと映画の中にぶち込んでいく。かといって、重くはない。そこには楽天主黒木のコミカルな世界も垣間見える。これがまた楽しい。

ウエルメイドで予定調和の作品が氾濫する映画界のなかで、そんな本音で撮った黒木の作品は、ATGを拠点にした映画ファンは見逃さない。私もその一人だ。また、そうでなければ、撮影所をバックに持つ監督が主流であった時代に生き抜くことは出来なかつただろう。

もう一つ、彼の秀でたところは自分を俯瞰し客観視できるセンスを持っていたことだ。時には、撮影時の自身による不甲斐ないトラブルや出来上がった作品の毀誉褒貶も、甘んじて受け止め学習している。これは表現者として大事

な資質で、どんなひどい失敗をしても、めげず立ち直って創作を続けていくパワーになっていた。それは幼少時から鍛え上げられた並外れた忍耐力と洞察力も下支えになっていたと言ってもいいのではないか。

彼の生涯14作品の中には失敗作もあれば秀作もある。これほど出来不出来の振幅の大きかった監督もめずらしい。そして一見温厚で周りの意見を取り込みながら撮影しているように見えるが、決して妥協はしなかった。彼の撮影手法はドキュメンタリー出身者らしく、演技指導なし、一発勝負で(ワンテーク)、最後の編集も演出の一部と考え決して他人任せにしなかった。日頃から「映画は多数決で決めるもんじゃないからね」とか、「映画監督はエゴイステイックな存在なんだよ」と言って関係者を軽々と裏切った。

黒木は長年トラウマになっていた戦争で亡くした友人への贖罪の意志を、映画を通じて吐露し、2006年4月静かに逝った。唯一心残りがあるとすれば、それは「映画監督山中貞雄」の映画化が陽の目を見なかったことだろう。黒木が満州の日本人小学校で登校拒否していた頃、地続きの黄河流域の「開封」という地で山中は無念の死を遂げてい

る。

日本映画界が生んだ不世出の天才、29歳で夭折した山中を、黒木は死の直前まで撮りたいと執念を燃やしていた。それは叶わなかったが、山中の功績を顕彰しようと彼が中心になって立ち上げた「山中忌」は、後輩たちに引き継がれていくだろう。

戦前の軍国主義教育から一転、戦後黒木が価値観を見失っていた頃出会ったのが、同志社大の岡本精一教授（京都精華大学学長、憲法学者、法学者）だった。恩師から自由の概念を徹底的に教わり、かつて軍国少年だった黒木はわが身を顧みて、「精神的な自由」を生きることとを「是」とした。黒木は生前、映画が撮れなくなった時「自由」を墓碑銘にしたい、と言っていた。遺言通り今、彼は恩師岡本教授の薫陶を受けた同志たちと一緒に、京都の西にある鳴滝霊園の「自由」と書かれた石碑の下に眠っている。

#### 黒木が残した言葉

「映画は全部幻想なんだけど、人生をそっくり表現できる素晴らしいツールだ」